



源氏物語 八

阿部秋生
今井源衛
秋山 虔
鈴木日出男

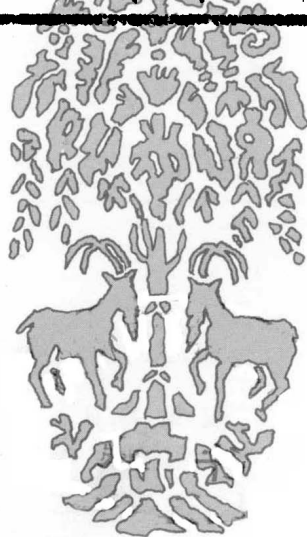
校注・訳



阿部秋

・ 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



小学館

完訳 日本の古典 第二十一巻 源氏物語(八)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔
今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二-3-1

振替口座 東京八-200番

電話 編集(03)230-5141 業務(03)

230-5333 販売(03)230-5739

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

© A Abe K. Akiyama 1987

G. Imai H. Suzuki

(著者検印は省略
いたしました)

ISBN4-09-556021-5

目次

凡例	三
原文 現代語訳	
句宮	一一・二七九
紅梅	二九・二八九
竹河	四五・二九九
橋姫	九一・三三〇
椎本	一三三・三五七
総角	一七五・三八六
校訂付記	二六九
卷末評論	四五三

付 録

引歌一覽	四七一
各卷の系図	四九八
地 図	五〇五
官位相当表	五〇八

口絵目次

源氏物語絵巻／竹河	1
源氏物語絵巻／橋姫	2
源氏物語図扇面／橋姫・総角	4
〈装丁〉	
中野 博之	

凡 例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第八冊（匂宮・総角）の底本には大島本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1 段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しとを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「」でくくり、肩書を付した。

2 宛字は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

大正し↓大床子だいしやうじ 外尺↓外戚げさく 五↓碁ご 木丁↓几帳 本上↓本性ほんじやう せふ正↓撰政せんせい あか
月↓暁

思給る↓思ひ（う）たまふ（へ）る 侍なり↓はべなり・はべるなり 也↓なり

猶・尚↓なほ 中／＼↓なかなか

3 「／＼」「／」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「／＼」「／」を「々」に改めたものもある。

つ／＼つつ やう／＼↓やうやう

日／＼日々 人／＼↓人々 御方／＼↓御方々

4 漢語の韻尾の m・n 音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的には n 音（ん）表記に統一したが、例外もある。

三位（サンミ） 散位（サンニ） 汗衫（かぎん） 竜胆（りんだん）（または「りうたむ」）

5 底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

かるしーかろし（輕し） かぞふーかずふ（数ふ） うまるーむまる（生まる） うめーむめ（梅）

まなーまんなーまむな（真字） んーむ（助動詞） なんーなむ（助詞） なめりーなむめりーな

んめり ついしやうーついそう（追従） こきでんーこうきでん（弘徽殿） じようきやうでんー

そきやうでん（承香殿） おほいどのーおほと（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽（だいせん）の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1 簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2 本文の見開きごとに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、↓を付してページと注番号を示した。

3 『源氏物語一〇七』（第一冊）第七冊を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

↓帚木①四九頁（本文を参照する場合） ↓紅葉賀②五七頁注三（脚注を参照する場合）

↓須磨③④（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4 語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるよう心がけた。

5 段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批評などには、◆を付して記した。

6 引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7 登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「地図」「官位相当表」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1 原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2 そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・内心語・引用における「」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3 和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（ ）内に示した。

4 見出しは、本文に付した見出しと同じものを現代語訳の該当箇所につけた。

5 原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、巻末評論は、本巻所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。

一、巻末付録として、「引歌一覧」「各巻の系図」「地図」「官位相当表」を収めた。

一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。

1 本文は、阿部秋生が担当した。

2 脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。

3 現代語訳は、秋山虔が執筆した。

4 巻末評論は、今井源衛が執筆した。

5 付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他

1 口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。

2 口絵に掲載した『源氏物語絵巻』については徳川黎明会の、『源氏物語図扇面』については浄土寺の協力を得た。

源
氏
物
語

句^{にほふ}

宮^{みや}

巻名 源氏死後の人々の動静が語られる巻。次世代の主人公として匂宮、薫が紹介され、世人が彼らを「匂ふ兵部卿、薫る中将」ともてはやした、とあることによる。

梗概 光源氏の亡き後、その声望を継ぐほどの人物は見いだしがたかった。ただわずかに、当代の三の宮（匂宮）と女三の宮の若君（薫）とが、ぬきんできているとの評判が高い。

匂宮は紫の上から伝領した二条院を里邸としている。女一の宮は六条院に住み、二の宮も右大臣夕霧の次女を娶って同院を里邸としている。長女も東宮に入内させている夕霧は、匂宮も婿にと望みもするが、匂宮にはその気がないらしい。花散里は二条東院に、女三の宮は三条宮に移り住んでいる。夕霧は落葉の宮を六条院の東北の町に迎え、三条殿の雲居雁のもとと月に十五日ずつ通う律儀さである。

薫は、源氏の希望どおり、冷泉院、秋好中宮に特に目をかけられ、十四歳での元服も冷泉院で行われた。その年の秋には右近中将になり、加階するなど、目覚ましい昇進ぶりに加えて、院の御殿の対屋に曹司を与えられ、今上や後の宮（明石の中宮）、夕霧からもたいせつに扱われる、まさに世の寵児であつたが、当の薫本人は、周囲からの厚遇に、かえって悩みを深めていた。おのれの出生にかかわる疑念に苦しんでいる彼は、この世の恋も栄華も空しく、父母の罪障を思い、出離の志を深く抱いていたのである。

薫には生れつき仏身を思わせる芳香が備っていた。親友の匂宮は、それへの対抗心から、薫物に心を砕いている。世間の評判はこの二人に集中し、娘の婿にと望む権門は多いが、匂宮は、冷泉院の女一の宮に思いを寄せている。一方、かりそめの相手は多いものの、厭世の氣持が強い薫は、現世の絆を増すことを怖れて女性関係に消極的である。夕霧は、典侍腹の六の君を、いずれは匂宮か薫にと思いいながら、落葉の宮に託して、多趣味な姫君に育てようとしている。

薫二十歳の正月、夕霧は六条院で賭弓の還賽を主催した。薫も夕霧に強引に誘われて匂宮たちとともにその宴に出席した。

にほふ兵部卿

〔一〕源氏の死後、句宮 光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、と薫並んで世評高し

そこらの御末々にありがたかりけり。遜位の帝をかけたて

まつらんはかたじけなし、当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとりどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

ただ世の常の人ざまにめでたくあてになまめかしくおはするをもととして、さる御仲らひに、人の思ひきこえたるもてなしありさまも、いにしへの御ひびきけはひよりもややたちまさりたまへるおぼえからなむ、かたへはこよなういつくしかりける。紫の上の御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。春宮をば、さるやむごとなきものにおきたてまつりたまて、帝、后いみじうかなしうしたてまつり、かしづききこえさせたまふ宮な

一 光源氏の死を、その名にふさわしく、日の光が隠れたと喩えた。
二 源氏の威光を継がれるような人。「影」は「光」の縁語。

三 夕霧の大勢の子などをさす。

四 退位した冷泉院。「かく」は言う意。語り手は、院と源氏の容貌の酷似に想到しながらも、誰も知らぬ親子関係として封じ込める。

五 今上帝第三皇子。句宮。

六 六条院。句宮は紫の上から愛育され、薫とともに六条院で成長。女三の宮腹の若君、薫。

ハ「きよら」は最高の美しさ。

九 世間の噂どおりに。

一〇 「まばゆき」は源氏の「光」に照応。以下、宮も薫も、源氏の非現実的なまでの理想性とは異質。

二 源氏の子孫という関係から。

三 昔の源氏の評判や威勢よりも。若年の源氏は、後見もなく、絶対的な世評は得られなかった。

三 評判の高きから、一つには。

四 ↓御法〔五〕・幻〔五〕。

五 句宮と同じく明石の中宮腹。

六 「たまひ」の首便無表記。

七 以下、帝・中宮の、句宮愛育。

れば、内裏^{うち}住^ずみをせさせたまつりたまへど、なほ心やすき古里^{ふるさと}に住みよくし
たまふなりけり。御^{げん}服^{ふく}したまひては兵部卿^{ひやうぶきやう}と聞^{きこ}こゆ。

(三) 今上の皇子たちと
女^メ一の宮は、六条院南^{ろくじょういんなん}の町^{まち}の東^{ひがし}の対^{たい}を、その世の御^みしつら
ひあらためずおはしまして、朝夕に恋^{こひ}ひしのびきこえたま

ふ。二^ニの宮も、同じ殿^{どの}の寝殿^{ねどの}を時々の御^み休み所^{やすみどころ}にしたまひて、梅壺^{うづ}を御^ご曹司^{そうし}に
したまひて、右^{みぎ}の大殿^{おほいどの}の中姫君^{なかつひめぎみ}を得^えたまつりたまへり。次^{つぎ}の坊^{ぼう}がねにて、い
とおぼえことに重々^{しげしげ}しう、人柄^{じんがら}もすくよかになんものしたまひける。

大殿^{おほいどの}の御^ごむすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君^{おほひめぎみ}は春宮^{とうぐう}に参^{まゐ}りたまひて、

またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。その次々^{つぎつぎ}、なほみなついで^{ついで}のま

まにこそはと世の人も思^{おも}ひきこえ、后^{きさき}の宮^{みや}ものたまはすれど、この兵部卿宮^{ひやうぶきやうみや}は

さしも思^{おも}したらず、わが御^ご心^{こころ}より起^{おこ}こらざらむことなどは、すさまじく思^{おも}しぬ

べき御^ご氣色^{けしき}なめり。大臣^{おとど}も、何かは、やうのものと、さのみうるはしうはと、

しづめたまへど、またさる御^ご氣色^{けしき}あらむをばもて離^{はな}れてもあるまじうおもむけ

て、いといたうかしづききこえたまふ。六^むの君^{きみ}なん、そのころの、すこし我^{われ}は

一 帝・中宮は、匂宮に。

二 二条院。往年の紫の上の居所。
兵部省長官。多く親王が就任。

◆光を喪^{うしな}つたとき源氏の死後の

動向から、第三部物語が開始。御
法・幻巻で紫の上に慈^{あはれ}まれた匂
宮が、まず登場する。

四 今上帝第一皇女、明石の中宮

腹。匂宮の姉。紫の上が愛育した。

五 紫の上の居所。

六 第二皇子、明石の中宮腹。

七 前述の六条院南の町の寝殿。

八 右大臣夕霧の次女。雲居雁腹。

九 東宮候補。「かね」は「予ね」。

一〇 夕霧の娘。雲居雁腹と藤典侍

腹と合せて六人。「大姫君」は雲居

雁腹か。↓夕霧[一七一]は本文

上問題がある。宿木[9][10]。

二 東宮は大姫君と、二の宮は中

姫君と、上から順に結婚したので、

匂宮も三の君と結ばれるかと。

三 明石の中宮。

四 以下、匂宮の好色ぶりが躍如。

五 変りばえのないこととする。

六 帝や中宮の意向。夕霧は先方
のどんな出方にも応じられる構え。

と思ひのぼりたまへる親王たち、上達部の御心尽くすきはひにものしたまひける。

〔三〕源氏の御方々のその後と夕霧の配慮

さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべくき住み処どもに、みなおのおの移ろひたまひしに、花散里

と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける。入道の宮は、三条宮におはします。今後は内裏にのみさぶらひたまへば、院の内さびしく人少

なになりけるを、右大臣、「人の上にて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限りの世に、心をとどめて造り占めたる人の家居のなごりなくうち棄てられ

て、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれに、はかなき知らるるを、わが世にあらん限りだに、この院荒らさず、ほとりの大路など人影離れはつまじ

う」と思ひのたまはせて、丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。

二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にのしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をし

七 藤典侍腹。求婚者たちが多く、花形的存在となっている。

八 二条院や六条院に住んでいた源氏の妻妾たちは、源氏の死後、天皇崩御の後に皇妃たちが実家などに退散するのに酷似した表現。

九 二条東院。源氏出家の際分与。女三の宮。朱雀院から三条宮を下賜。↓鈴虫〔八三〕注ハ。

三 前二〇行「后の宮と同じ。秋好中宮に對して「今」。

三 六条院。

三 源融の河原院、中国の例では秦の始皇帝の阿房宮や唐の玄宗皇帝の華清宮などが想定されよう。

四 東の京極大路、南の六条大路あたりには貴族の邸宅が少なくない。

五 東北の、夏の町。もとの花散里の居所で、夕霧の部屋もあった。落葉の宮のこと。

六 雲居雁。夕霧の巻から十年後、彼女も三条殿に戻っている。

七 夕霧らしい合理的な解決法。『宇津保物語』(楼上)にもみえる。

八 明石の君の子孫。二条院には勾宮、六条院南の町の東の対には女一の宮、寝殿には二の宮が住む。

つつ、あつかひきこえたまへり。大殿は、いづ方の御事も、昔の御心おきてのままに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつりたまふにも、対の上のかやうにてとまりたまへらましかば、いかばかり心を尽くして仕うまつり見えたてまつらまし、つひに、いさきかも、とりわきてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ。

天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。まして殿の内の人々、御方々、宮たちなどはさらにも聞こえず、限りなき御事をばさるものにて、またかの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。春の花の盛りは、げに長からぬにしも、おぼえまさるものとなん。

〔四〕薫、冷泉院と中宮の寵を得て榮進する

二品の宮の若君は、院の聞こえつけたまへりしまでに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづき、后の宮も、皇子たちな

一 「大殿」は夕霧。

二 明石の中宮、明石の君、花散里など、源氏の後見の女君たち。

三 父源氏になり代った気持で。

四 紫の上が他の女君のようにご存命ならば。以下、夕霧の心中。

五 特に自分(夕霧)が好意を寄せていると紫の上が分つてくださるような機会も。野分の日(野分回)以来、夕霧の脳裡には紫の上の美貌が焼きついたが、思慕の情を表さずに終った。

六 心中叙述が地の文に転ずる。

七 「院」は源氏。

八 源氏の死を釈迦の寂滅に喩える。「仏ハ此ノ夜、滅度シタマフコト、薪尽キテ火ノ滅ユルガ如シ」(法華經・序品)。「火」の縁語で、「灰」「投げ木」をひびかす。

九 明石の君や花散里など。

一〇 秋好中宮、明石の中宮、二の宮、三の宮(匂宮)、女一の宮など。

二 紫の上が春の人であることを言いこめる。「残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はての憂ければ」(古今・春下、読人しらず)。

三 女三の宮。「二品」↓若菜下回。